

## 腹壁マンソン孤虫症のMRI

北井隆平, 木村 明, 水谷富士雄, 馬場国晴,  
木村良平

鯖江木村病院

### はじめに

マンソン孤虫症は幼虫移行症であり、人体内では深部組織に迷入したり、組織内に移動性腫瘤を形成する。

本疾患は近年の海外旅行者の増加や食生活の変化を背景に増加傾向にある<sup>1)</sup>。我々は腹部腫瘤にMRIを施行し、虫体が移動した際に生じた皮下脂肪組織内のトンネルと虫体をMRIにて指摘し得た症例を経験したので報告する。

### 症 例

患者：46才 女性

主訴：右腹部腫瘤

現病歴：5年前に左胸部の腫瘤に気づいたが放置していた。2年前には左季肋部に、最近右下腹部に移動し痛みを伴うようになったため来院した。

家族歴：妹が5年前マンソン孤虫症にて虫体摘出をされている。

渡航歴・食歴：特記すべきことなし

初診時現症：左下腹部皮下に直径約5cmの硬結を触知するが、可動性があり、皮膚には異常を認めない。5年前、2年前に存在したという

左胸部、左季肋部には腫瘤、索状物は触知しなかった。

### 検査所見・臨床経過

血液学的検査：血沈、CRP等の上昇はなかった。好酸球は(240/mm<sup>3</sup>全白血球比4.3%)で正常であったが、Ig-Eが331 IU/mlで軽度上昇していた。

### 手術所見・病理組織

右下腹部の腫瘤を切開すると内部は空洞で、扁平な白色の虫体を容易に確認できることができた。虫体の尾側より20cmの虫体を切断することなく摘出しえた (Fig.1)。

虫体周囲の肉芽組織は好酸球と形質細胞の浸潤を主体とする炎症反応がみられた。

### MRI 所 見

初診時施行したMRI (島津 SMT-1.0 1.0T 超電導装置) のT<sub>1</sub>強調像 (SE法 TR=500, TE=20) の冠状断で、皮下脂肪組織の中を虫体が移動し形成されたと思われる空洞を認めた。

比較のため撮影した健常ボランティア (48才

キーワード sparganosis mansoni, MRI, abdominal wall

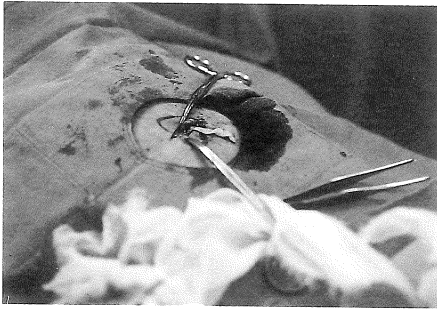


Fig.1. Operation was performed by local anesthesia. The worm found easily in the subcutaneous fat tissue was white, flat and movable. The length was 20 cm.

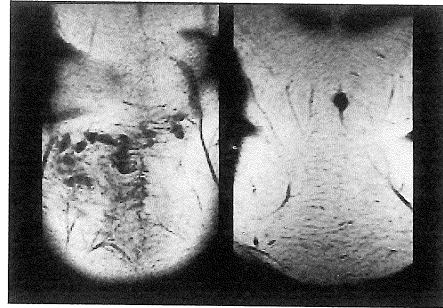


Fig.2. Left : Coronal T<sub>1</sub> weighted image (WI) shows the tunnel formation in the subcutaneous fat tissue of the abdominal wall. Right : Normal volunteer (48-years-old women, she had two children) is presented.

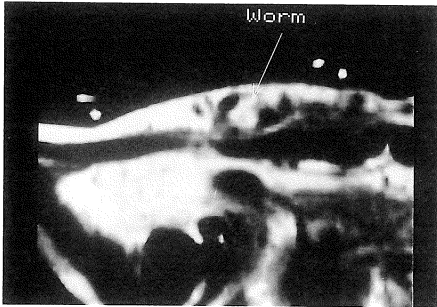


Fig.3. Sagittal T<sub>1</sub> WI revealed the worm around low intensity cavity.

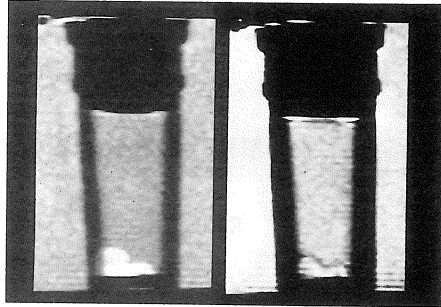


Fig.4. MR images of removed Sparganosis mansoni was performed on same protocol. The worm was high intensity on T<sub>1</sub> WI and iso intensity on T<sub>2</sub> WI resemble to fat intensity. Left : T<sub>1</sub> WI Right : T<sub>2</sub> WI

2 回経産婦) の同一条件の MRI では、腹壁の脂肪組織内で浅腹壁静脈を認めるが、皮下脂肪組織内は均一である (Fig.2)。

腫瘍の横断像では空洞の中心に脂肪組織とほぼ同一の signal intensity の虫体を認めた (皮膚上のスポットは位置同定用のチューブ) (Fig.3)。

取り出した虫体を生食内に置き撮影した MRI では虫体自身は水と比して T<sub>1</sub> で high-intensity, T<sub>2</sub> で iso-intensity を示した (Fig.4)。

## 考 察

我が国ではマンソン孤虫症は 385 例余りが報告されており、近年では毎年数例から十数例の症例報告が行われている<sup>2)</sup>。ヘビ、カエル、ニワトリの生食が主な感染源として考えられており、食文化の多面化により今後注意が必要な疾患の一つであると思われる。

マンソン裂頭条虫の終宿主はイヌやネコで、人体内では幼虫移行症として深部組織に迷入したり、皮下に移動性の腫瘤を形成する。影井ら

の報告によれば半数以上が、皮下組織より発見されており、乳癌との鑑別が問題となった例や、陰嚢腫瘍として摘出された症例も報告されている<sup>3)</sup>。

今回の我々の経験した症例においても、当初、姉妹のマンソン孤虫症の既往歴を知らされず診断に苦慮した。

MRIにおける所見は今だ報告がないが、本症例では病歴に示す通り虫体の移動に伴って生じた皮下脂肪織内のトンネルを認めた。

このような皮下脂肪組織の亀裂は妊娠線等も考えられるが、我々の撮影した健常ボランティア（いずれも妊娠経験あり）では認められず、本疾患に特徴的と考えられる。

また虫体は  $T_1$  high,  $T_2$  iso-intensity で脂肪と同様の信号パターンを示し、皮下脂肪織と信号強度上は区別が困難であるが、手術所見と合わせて考えると空洞内部が虫体であると思われる。

#### 文 献

- 1) 山根洋右：条虫症。今日の治療指針，1991：174-175，1991.
- 2) 西山利正：条虫症の幼虫移行症。寄生虫学会雑誌，41 (2)：143-144，1992.
- 3) 影井 昇：幼裂頭条虫症。最新医学，44 (4)：877-883，1989.

### MRI of Sparganosis Mansonii in Abdominal Wall

Ryuhei KITAI, Akira KIMURA, Fujio MIZUTANI,  
Kuniharu BABA, Ryouhei KIMURA

*Sabae Kimura Hospital*  
4-4-9 Asahi-machi, Sabae, Fukui, 916

A 46-year-old female was consulted our hospital with complain of lower abdominal pain and tumor. For several years the tumor has been wandering from the chest wall to the left upper abdomen, and localized right lower abdomen three monthes ago.

MR Imaging demonstrated tunnel formation in the subcutaneous fat tissue of the abdominal wall, of which Sparganosis mansonii has been wandering.

The worm was shown mainly as high intensity on  $T_1$  weighted images (WI) and iso-intensity on  $T_2$  WI, as same as fat intensity.